

## 国際資料室における来室状況の分析 院生チューターの役割を中心に

井村倫子

### 要旨

本稿では、国際資料室に設置されたチューターノートやチューターからの聞き取り調査から、資料室チューターの果たしている役割を中心に、資料室のあり方の方策を提案した。調査結果から、来室者数や相談件数・内容などから、チューター業務は来談者への対応が主であること、および相談への対処はチューター個人の力量に任されていることが分かり、特性を持ったチューターの登用が望まれる。また、相談内容には院生チューターでは対処できないと思われるような問題も散見されたことから、その場合の対処法を徹底することも重要である。一方、チューターの不要な負担軽減を目的に、利用者への利用方法の文言化を図ることが必要である。最後に、資料室の利用頻度向上のために、国際資料室周知の徹底を図る改善策を提案した。

キーワード 国際資料室 チューター 相談内容 対処

### 1 本学国際資料室の概要

一橋大学国際資料室(以下、資料室)は学生国際交流室の一角に設置され、1999年4月の国際研究館への留学生センター移転に伴い、「国際資料室」との名称変更を経て現在に至る。資料室は実質的に、研究科博士後期課程所属の5名のチューターにより運営されている。

資料室は、本学東キャンパス国際研究館一階に位置し、留学生情報交換の場に供されているラウンジと空間上の透明性確保を期して、ガラス張り工法を採用している。開室時間は平日月曜日から金曜日の、午前10時から午後1時および午後2時から午後5時までの6時間、曜日毎に5名のチューターが在室して、来談者の相談に応じている。また、休業期間中のうち8月、3月は基本的に閉室とし、それ以外の休業期間は各チューターの都合および来訪者の利用状況に応じて閉開室を決定している。

現在、資料室は約120冊の蔵書に加え20種の雑誌を所蔵する。書籍は主に外国人留学生のための日本語・日本文化に関する資料と、これから海外留学をめざす学生のための資料、さらに異文化理解関連資料に三分される。

留学生用の資料は、日本語および研究方法に関するアカデミックな書籍から、宿舍の探し方、日本文化適応マニュアルなどいわゆる実用書まで多岐に渡る。海外留学志願者用の資料はTOEFL、GREを初めとする語学試験対策書、願書用エッセイの書き方に代表される出願対策書、さらに大学カタログ、国別留学事情、協定校のパンフレットなどを包括的に収集している。また異文化理解関連資料としては、旅行などの参考にもなるような各国の文化情報に関

する書籍から、留学生用ボランティア活動など草の根的な活動に関する書籍までが閲覧可能である。雑誌は、日本語・英語のみならず、中国語、韓国語、タイ語の計5ヶ国語で、留学生用、留学を目指す学生用の雑誌、合計22種類を購読し、最新刊の常時閲覧を可能にしている。

さらにLAN接続のコンピュータを設置し、在室のチューターによる書籍検索サービスも実施している。

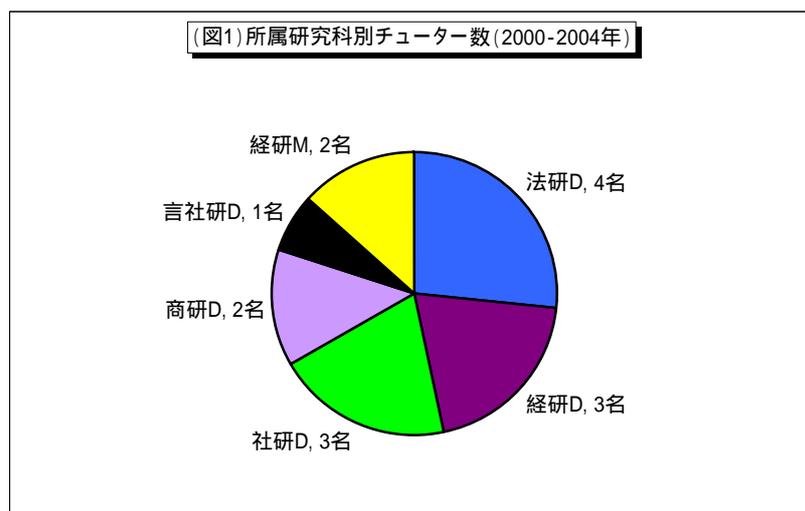
## 2 資料室チューターの概要

平日、資料室には、曜日毎に1名、週のべ5名のチューターが在室する。チューター選考に際しては、各研究科の教員を通しての推薦が一般に採用されている。これはチューターが主として博士課程在籍学生から採用されることに起因する。

業務内容は主に蔵書整理と個別相談である。蔵書整理は定期購読誌の入れ替えが主作業であり、書籍に関しては雑誌ほど頻繁な受け入れはない。

個別相談は時期によっては日に十数件に上ること、また相談内容によっては1件で数時間かかるケースも報告され、チューターにはこちらが主業務になっていると考えられる。本件に関しては次章以降で具体的に詳述する。

残存する2000年以降の資料を調査した結果、これまでに再任を含めてのべ14名の大学院生がチューターを担当しており、その内訳は図1の通りである。人数の差異はあるものの、この4年間は各研究科からいずれも採用実績が見られる。



## 3 来談状況分析

本節では、担当日チューターの手になる日誌(以下、チューターノート<sup>1</sup>)をもとに、来談

<sup>1</sup> 学術的に確立された名称ではない。

者データ並びに相談内容の分析を試みる。

利用者の来室目的は閲覧と相談に二分され、これは前節で述べたチューター業務とほぼパラレルな関係にある。チューターノートは2000年1月より記録があるが、閲覧者の人数に関しては2002年4月からの言及となっているため、本報告では2年間のみの記録から報告を行う。

### 3.1 国際資料室利用頻度（月別）の報告

2000年1月から2004年3月現在までの来室者はのべ2,229人に上る<sup>2</sup>。

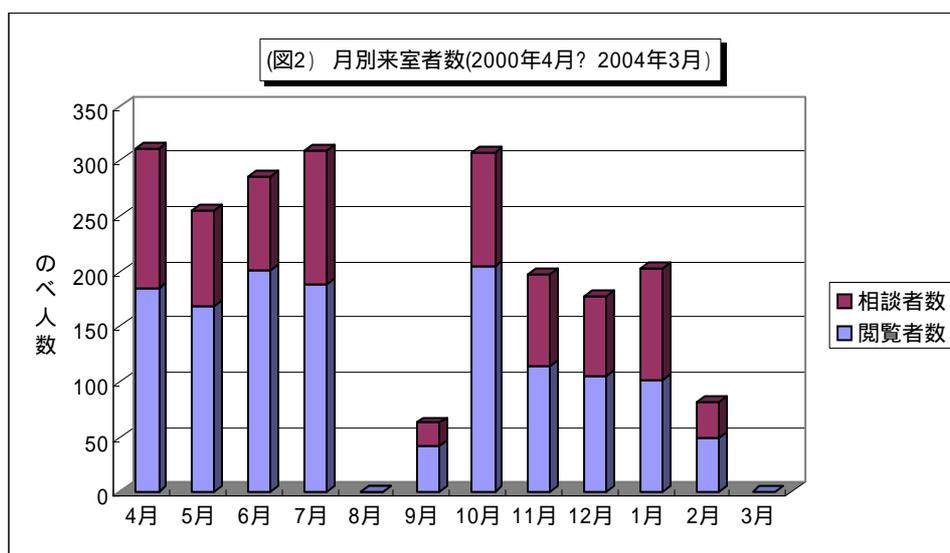
#### 3.1.1 月別来室者件数

図2は2002年1月からの月別来室者数を示す。

8月および3月は閉室のため0件となっている<sup>3</sup>。9月(63件、2.87%)、2月(82件、3.74%)の件数が少ないのは閉室日が含まれている事由による<sup>4</sup>。4月(311件、14.18%)、7月(310件、14.14%)および10月(308件、14.04%)に来室件数が多く見られるが、これらは閉室前後の月であり、閲覧を目的とした来室者が多くあったと推測される。

また冬学期(1031件、47.01%)より夏学期(1163件、52.99%)の方が、利用頻度がやや高い傾向を示すが、これは冬学期の閲覧者が少ないことによる。一方、相談者数に関しては1ヶ月に約80名~120名という幅で、閲覧者数に比して安定した来室件数となっている。

また、来室者全体では閲覧者がのべ1,360名(62.01%)、相談者がのべ834名(38.03%)である。



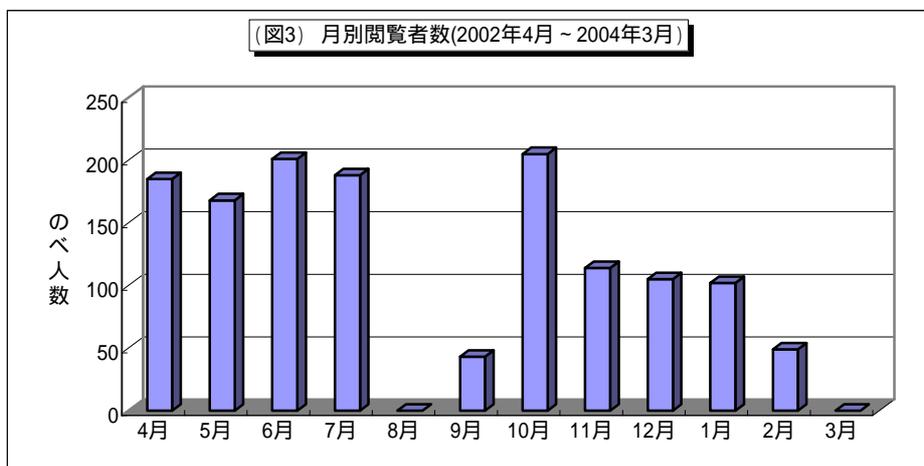
<sup>2</sup> 当該日に閲覧・相談の両方を目的に来室した者は2回としてカウントされる。

<sup>3</sup> 年間月別件数に整合性を持たせるため、端数月にあたる2000年1、2月は含めない。

<sup>4</sup> 9月、2月は平均すると約半月が閉室である。

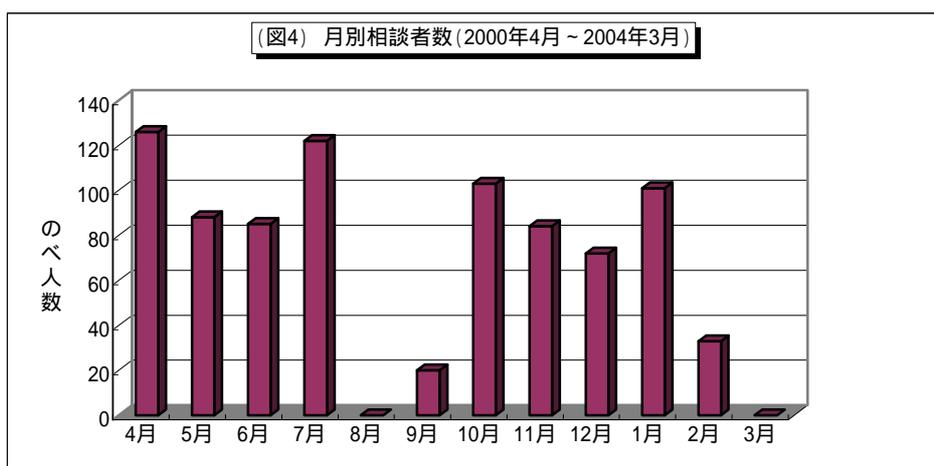
### 3.1.2 月別閲覧者数

図3は月別閲覧者数を示す。前述同様、夏学期(785件、57.72%)の方が冬学期(575件、42.27%)より若干多いことが観察できる。



### 3.1.3 月別相談件数

月別相談件数を示したものが図4である。夏学期(441件、52.87%)と冬学期(393件、47.12%)を比較して、相談件数に数量的な差は観察されないが、月別件数と相談内容との関係を考察すると、冬学期は66件、夏学期は27件と、冬学期の方により多く論文の日本語チェックの要請が見受けられる。これは図2からも判断されるが、論文提出のある1月は相談件数と閲覧者数がほぼ同数であり、11月、12月、1月と来室者が減少する傾向にある中、実質的な相談者数は101件(12.11%)という伸び率を示している<sup>5</sup>。



<sup>5</sup> 他の相談内容から月別来室者数との関係を見ても、閉開室日関連の質問以外、月別で著しく内容の偏った相談は特に見られない。

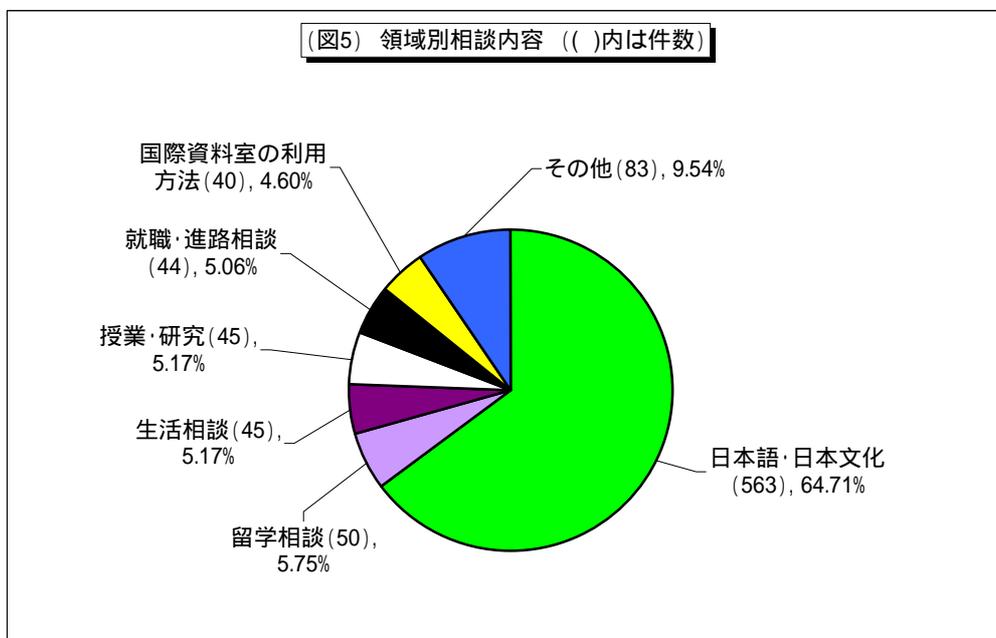
### 3.2 相談状況

#### 3.2.1 相談内容の分類

チューターノートは記載内容の統一がこれまで図られてないが、本節ではその相談内容を便宜的に7分類し、項目別に分析を行う。項目は(1)日本語・日本文化に関する相談(2)留学に関する相談(3)生活に関する相談(4)授業・研究に関する相談(5)就職・進路に関する相談(6)資料室の利用方法(7)その他とする。

2001年1月からの記録を上記7項目によって分析した結果が図5である。

相談は、(1)日本語・日本文化(563件)が64.71%を占め、他の相談項目は約5%で並ぶ。相談項目から(2)留学相談(6)資料室の利用方法を除くと、相談は外国人留学生からが主であると考えられる。



#### 3.2.2 日本語・日本文化に関する相談

まず日本語・日本文化に関する相談を考察する。本件は相談内容が多岐に渡るので、図6に細分化したグラフを掲載する。また、表1は日本語・日本文化に関する相談のうち、大多数を占める日本語チェックの詳細である。

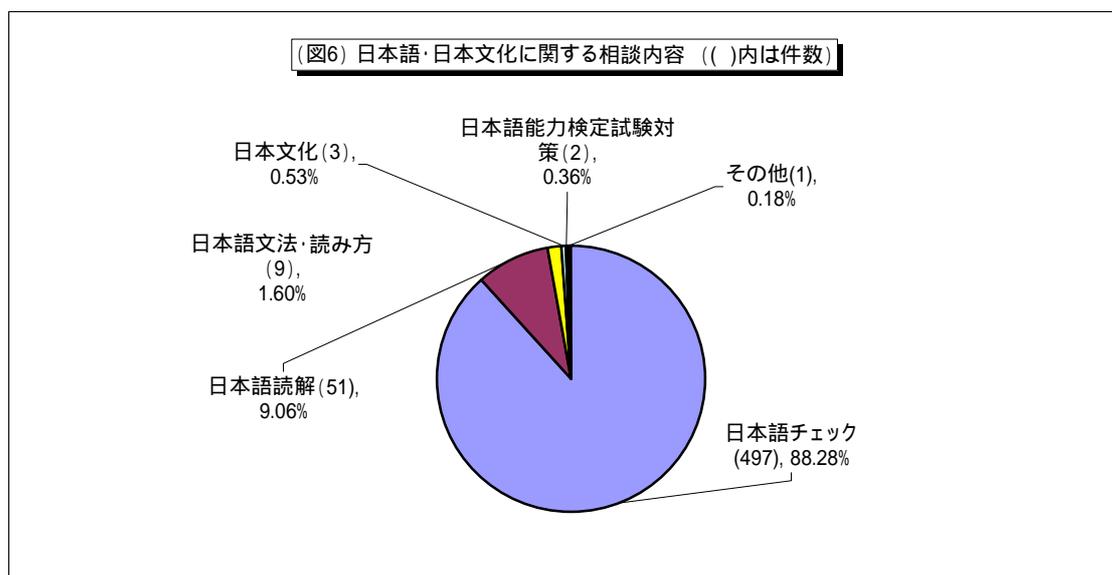
本相談中、88.27%(497件)は日本語チェックの依頼であり、チェック対象はレポート・レジュメ(190件、38.23%)、論文(93件、18.71%)、研究計画書(52件、10.46%)、奨学金等書類(31件、6.24%)、就職活動関連(10件、2.01%)、その他(121件、24.35%)となる<sup>6</sup>。レポート・レジュメに関しては表記チェックのみならず、口頭発表の準備として、チ

<sup>6</sup> その他には願書、旅行申請書、メールや手紙のような私信チェックなどが含まれる。しかし、チューターノートには「その他日本語のチェック」のような記述もあり、分析にまで至るのは難しい。

ューターにレジユメの朗読録音を求めるという、音声的な依頼も7件含まれている。

次に多い日本語読解の依頼(51件、9.06%)は文献、保証書内容等が見受けられる。これらには留学生が日本語に翻訳した文章のチェックに加えて古い文献の現代語訳の読解、外国語テキストの翻訳が含まれ、チューターには留学生ニーズを踏まえた高度な言語的知識および素養が要求されていることが理解できる。

その他の相談は日本語文法や表記の読み方に関する相談(9件、1.60%)、日本文化に関する質問(3件、0.53%)、日本語能力検定試験の対策や助言(2件、0.35%)、その他(1件、0.09%)に分かれた。



(表1) 日本語チェックの詳細

日本語チェック	詳細	件数	日本語チェック領域 に対する割合	日本語・日本文化領域 に対する割合
	レポート・レジユメ	190	38.23%	33.75%
	論文	93	18.71%	16.52%
	研究計画書	52	10.46%	9.24%
	奨学金等書類	31	6.24%	5.51%
	就職活動	10	2.01%	1.78%
	その他	121	24.35%	21.49%
		497	100.00%	88.28%

### 3.2.3 留学に関する相談

表2は留学相談の詳細である。

詳細項目から、留学に関する相談は日本人、その他の留学希望者から寄せられるものが多いと推測される。この領域に関する詳細のうち「留学そのものに関する相談」が62%(31

件)を占めるが、これら相談に関してチューターから留学生相談室への照会はない。よって本件に関してはチューターの個人的な経験および人脈を頼った対応がされていると推測される。また図書・資料の問い合わせ(16件、32.00%)に関しては、必要とする書籍の購入希望提示や、閲覧希望資料の設置場所等の問い合わせである。

(表2) 留学相談の詳細

留学相談	詳細	件数	留学相談領域に対する割合	相談全体に対する割合
	留学に関して	31	62.00%	3.72%
	図書・資料の問い合わせ	16	32.00%	1.92%
	TOEFL	3	6.00%	0.36%
		50	100.00%	6.00%

### 3.2.4 生活に関する相談

表3は生活相談の詳細である。

生活相談には多様な領域が含まれる。奨学金に関する相談は、申請書の書き方など日本語チェックとも関連するが、どのような書き方をすれば通るのかといった方略的な相談や、奨学金そのものに関する相談も含まれる。またパソコンに関しての相談の中には、購入に際しての機種相談や、ソフトウェアの操作法、多言語対応の方策など、テクニカルな質問も散見される。また件数としては少ないが、住居・アルバイト・入国管理局への代理問い合わせなど、外国人留学生にとって生活上、切実かつ重要な相談も見られる。

(表3) 生活相談の詳細

生活相談	詳細	件数	生活相談領域に対する割合	相談全体に対する割合
	奨学金	15	33.33%	1.80%
	パソコン	10	22.22%	1.20%
	寮、宿舍	5	11.11%	0.60%
	サークル	4	8.89%	0.48%
	アルバイト	4	8.89%	0.48%
	部屋探し	2	4.44%	0.24%
	国保手続き	1	2.22%	0.12%
	格安航空券の買い方	1	2.22%	0.12%
	電話債権	1	2.22%	0.12%
	入管への代理問い合わせ	1	2.22%	0.12%
	生活相談	1	2.22%	0.12%
		45	100.00%	5.40%

### 3.2.5 授業・研究に関する相談

表4は授業・研究に関する相談の詳細である。

研究・専門分野に関する相談(17件、37.77%)に関しては、研究の仕方や研究目的といった研究全般に関わる質問から、調査方法、アンケート項目の検討などの詳細にいたる相談が持ち込まれている。一方、文献検索の依頼(5件、11.11%)には資料室設置のコンピュータで、チューターがインターネットを使って検索するという報告が見られる。その他、勉強の仕方(5件、11.11%)や論文の書き方(3件、6.66%)など外国人留学生が学ぶ機会の少ないアカデミック・スキルに関する諸問題が個人相談としてチューターに持ち込まれることが見て取れる。

(表4) 授業・研究に関する相談の詳細

授業・研究	詳細	件数	授業・研究領域に対する割合	相談全体に対する割合
	研究、専門分野の質問	17	37.77%	1.95%
	授業について	13	28.88%	1.49%
	文献検索の依頼	5	11.11%	0.57%
	勉強の仕方	5	11.11%	0.57%
	論文の書き方	3	6.66%	0.34%
	試験対策	1	2.22%	0.11%
	論文製本に関して	1	2.22%	0.11%
		45	100.00%	5.40%

### 3.2.6 就職・進路に関する相談

表5は就職・進学相談の詳細である。

進学に関する相談が41件(93.18%)となっているが、この中には入試の面接に関する相談も含まれる。また進学・就職の選択に関する相談が3件(6.82%)報告されている。

(表5) 就職・進学相談の詳細

就職・進路	詳細	件数	就職・進路領域に対する割合	相談全体に対する割合
	入試・進学	41	93.18%	4.92%
	進路・就職	3	6.82%	0.36%
		44	100.00%	5.28%

### 3.2.7 資料室の利用方法に関する相談

表6は資料室の利用方法の詳細である。

まず資料室の目的および活動内容に関する質問16件(40.00%)と、チューター制度についての問い合わせ15件(37.50%)が合計77.50%を占める。また開室日に関する質問(7

件、17.5%) に関しては、月別相談件数と照合・検討を試みると、7月、1月といった休業期間前に多く問い合わせがあることが判明した。

(表6) 資料室利用法に関する相談の詳細

国際資料室の 利用方法	詳細	件数	資料室利用法領域 に対する割合	相談全体に対する 割合
	資料室の利用案内	16	40.00%	1.92%
	資料室のチューター制度	15	37.50%	1.80%
	資料室の開室日	7	17.50%	0.84%
	蔵書について	2	5.00%	0.24%
		40	100.00%	4.80%

### 3.2.8 その他の相談

その他の相談内容の詳細を表7に示す。

まず挙げられるのは、雑談である。これはチューターノートに一つの項目として記載されていた名称で、数多く見られるため、項目名としてそのまま採用した。具体的な内容に関してはチューターノートへの記述がないために、明らかにはなっていない。続いて図書館利用に関する相談、個人的な悩み、学生の照会、SARSに関する本学の対応などであり、これはチューターと個人的に知り合いの学生への対応も含まれると考えられよう。また、受験希望者への案内、個人チューターの探し方、教室の場所説明、付属図書館に関しての相談の報告もあり、本学の留学生支援システムや、大学の施設等に必ずしも習熟していない学生が少なからず存在することの証左である。

(表7) その他の相談の詳細

その他	詳細	件数	その他の領域に対す る割合	相談全体に対する 割合
	雑談	50	60.24%	6.00%
	図書館利用に関して	3	3.61%	0.36%
	個人的な悩み	1	1.20%	0.12%
	個人チューターの探し方	1	1.20%	0.12%
	コピーカード	1	1.20%	0.12%
	学生の照会	1	1.20%	0.12%
	一橋 SARS の対応について	1	1.20%	0.12%
	受験希望者の案内	1	1.20%	0.12%
	その他	24	28.92%	2.88%
		83	100.00%	9.95%

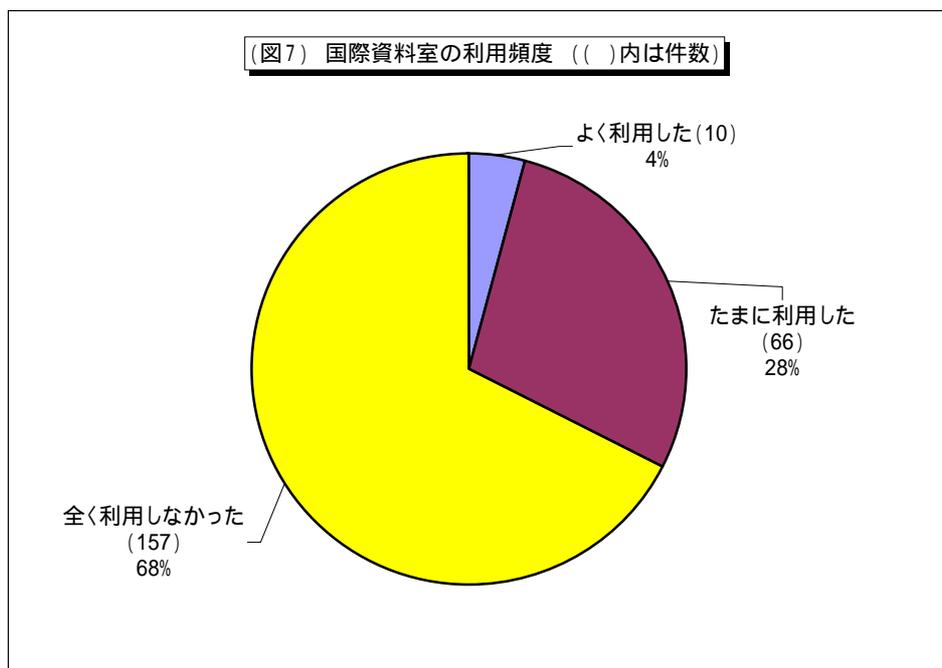
#### 4 留学生アンケート

本節では 2003 年度に行われた留学生アンケート<sup>7</sup>の調査項目から、チューターノートからは得られない情報 3 点を取り上げ、さらに検討する。資料室の利用頻度が図 7、チューター制度への満足度が図 8、資料室改善案が図 9 に示されている。

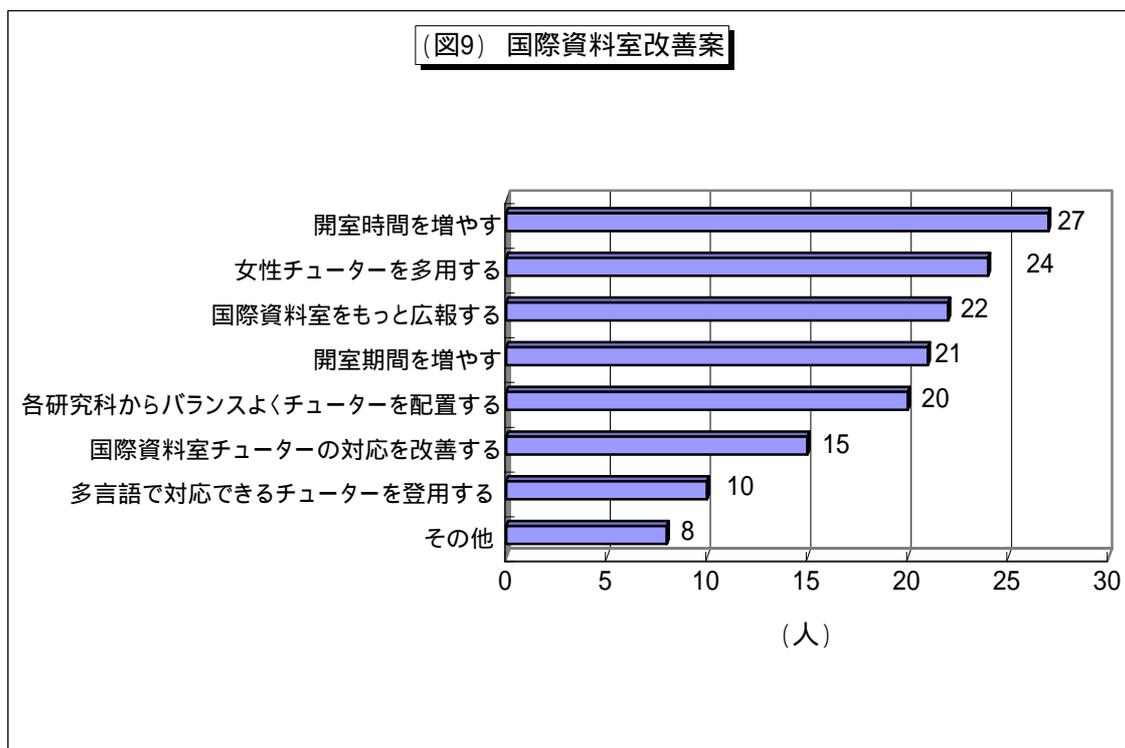
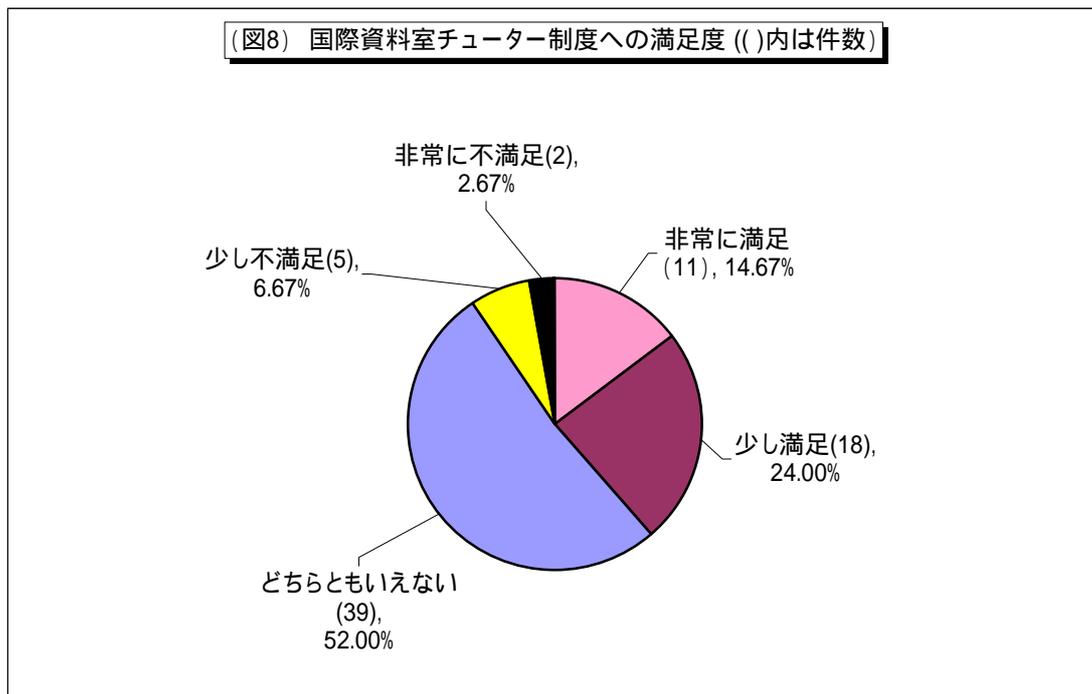
図 7 の利用頻度は、資料の閲覧頻度とチューターの利用頻度を合計して出したものである。この結果からは、約 7 割の学生が何らかの理由で資料室を利用したことがないことが分かる。

資料室チューター制度に対する満足度について「どちらともいえない」が半数を超える本回答は、資料室の利用頻度との関連から鑑みて、留学生アンケートに答えた外国人留学生の多くが資料室を利用しておらず、その結果、満足度に関しては「どちらともいえない」という回答になったことが予測される。満足度に関する「どちらともいえない」以外の回答を見ると、「1.非常に満足」「2.少し満足」を合計したプラス評価が 39%であり、「4.少し不満足」「5.非常に不満足」を合計したマイナス評価が 10%となっている。

また、図 9 の改善案として、「開室時間を増やす」には 27 名の支持が見られ、これはアンケート回答者数 (121 名) の約 22% に上る。さらに女性チューターの希望や資料室の広報体制の充実、開室期間の延長、チューターの所属に関する希望の順に改善案が寄せられている。



<sup>7</sup> 留学生アンケートは平成 15 年 7 月から 10 月にかけて、本学の全留学生を対象に、留学生課と留学生センターが提供するサービスへの、認知度や満足度等を調査する目的で行われたアンケートである。



## 5. 論考と提言

これまでの分析結果とチューターミーティングでの各チューターからの聞き取り調査を元に、考察を行う。

### 5.1 チューターの資質に関して

チューターの所属割合を見ると、社研、経研、法研、商研、言社研の5研究科からの登用があり、曜日毎の各研究科からのチューター配置も可能である。

しかし、主業務である相談対応の内容から見る限り、所属先の各研究科や研究分野に関する知識に関連した相談内容は、研究分野に関する質問17件(相談件数全体の1.9%)に留まっている。一方、相談には研究分野以外の個々の得意分野および領域を活かした対応が求められている事例が少なからず見受けられる。コンピュータに関する相談や、古い文献の解読、留学に関する相談はその一例である。よって研究科という枠に留まらず、チューター採用に際しては候補者の得意とする分野および領域を把握し、採用後は資料室を利用する学生にそれを周知するという施策が、資料室促進のために重要な役割を担うと考える。特に留学相談に関しては、外国人留学生チューターを除くと2003年度の担当者には海外留学経験者がいなかったこともあり、留学を希望する相談者への対応はチューター個人の知識と、問題解決意欲に一任されているのみであった。外国人留学生だけでなく、海外への留学希望者も情報収集で利用するという資料室の性格上、この解決に向けた方策の一つとして、留学経験者の積極的な採用を提言したい<sup>8</sup>。またこれと共に、今後は留学生アンケートの結果を踏まえ、性別も視野に入れた採用も実施していくべきであろう。

### 5.2 資料室の閉開室等に関して

閉室前後の来室件数が多いことを考えると、閉室期間の短縮も検討すべきである。従来はチューター自身の学会発表・博論執筆などのスケジュールに合わせて7月および2月の閉開室日を決定していたが、8月、3月の完全閉室も含めて、そのあり方を考えるべきであろう。というのは、閲覧目的で来室する学生が相談目的の学生を上回り、かつそれが留学検討の時期と重なりを見せるので、この時期は日本人来訪者の重要な目的の一つとして、留学先の情報収集が考えられるからである。特に夏学期に閲覧頻度が高いという事実は、学生生活の中で、この時期に留学を考え始めることが推測できる<sup>9</sup>。また、10月の利用頻度の高さは、次年度留学を考えている学生にとって、相談室が資格試験や応募書類の締め切り前の情報収集や勉強の場として機能したり、外国人留学生の日本語能力試験対策のための学習室として機能したりしていると考えられる。

この結果を踏まえて、留学情報書籍、情報誌の充実を図ることを検討し、さらに今後はアジア諸国への留学希望者を見据えて、同エリアに関する留学・生活情報書籍、雑誌の充実を図っていくべきであろう。また、研究科所属の留学生の中には母国へ一時帰国をせず、休業

<sup>8</sup> 海外の類似組織では留学経験者がこの種の相談の任についている例がある。

<sup>9</sup> 特に、如水会派遣の留学生を目指す学生にとって申請書配布の始まる4月から応募締め切りの9月頃までというスケジュールを考えると、7月、8月の休業中が留学準備をする期間となることが推測される。

期間を研究に集中する時間と位置づけているものが存在する可能性もある。この点からも閉開室の日程や決定方法について再考する必要がある。

それと同時に、閉開室日の案内の仕方や時期についても、検討する必要がある。開室日に関する質問（7件、全体の0.84%）に関して、月別相談件数と合わせて検討してみると、7月、1月といった休業期間前にこの問い合わせが多い。このことから、開室日に関して早くから掲示を行う必要がある。また、従前の資料室の入り口のみでの掲示も改め、今後は他の場所に掲示することも検討する必要がある。

### 5.3 相談内容と対処法

資料室のチューターが受ける相談は広範囲に及び、中には本来ならば留学生相談室が受けられるような相談にも応じていることが分かる。これまではチューター個人の知識や経験に応じた対応が取られてきたと考えられるが、今後は資料室の機能を本学の留学生サポートシステムの重要な一部と位置づけ、留学生センター全体として統一立った施策を展開しなければならない。例外もあるが、一般に資料室が開室されている期間は、留学生相談室も開室されていることから、チューターにとって判断や回答の困難な相談には、留学生相談室や留学生課への照会、およびアドバイザーへのコンサルテーション依頼を行うシステムを整えることも検討していく必要がある。そのためには、チューター会議の際に留学生相談室のアドバイザーにも参加を促すなどして、日ごろからお互いに顔の見える関係を築いておくことも大切だと考える。

また相談件数としては1件として数えられるものでも、論文の添削など、数時間の拘束を余儀なくされる相談も多々報告されている。この種の依頼には1件の相談だけに半日が費やされるということもあり、チューターの負担軽減を考えなければならない。留学生の中には英文和訳、中文日訳など、ほとんど訳さずに持参し、質問という形でチューターに翻訳を頼むようなケースもチューターミーティングでは複数聞かれたことから、依頼者への規則も協約しておくべきであろう。特にチューターから、日本語チェックの依頼を行ったまま退出し、後で取りに来るといような留学生への苦言が呈されていることもあり、文言化は緊要である。また、長時間かかると思われる日本語チェックは事前に予約する制度を策定し、負担軽減の措置を図るべきであろう。

また「雑談（50件、全体の6.00%）」が「その他」の項目に含まれているが、これを単なる無駄話として自粛する方針は採るべきではないように思われる。留学生アンケートでは、資料室のチューターとの雑談が外国人留学生にとって、会話の練習となっている可能性も示唆されている。留学生は一般に日本人の友人を作りづらいという認識を有していることから（有川, 2000）チューターとの何気ない会話が外国人留学生の会話練習や情報源、さらに日本人と口頭コミュニケーションが取れるという確認の場になっていることも考えられる。そのため他学生が閲覧等で資料室を利用している場合を除いては、チューターとの雑談も認め

ていいものとする。

なお授業・研究の仕方に関する相談については、件数としては多くはないものの、留学生アンケート内の「開講して欲しい日本語科目」と重ね合わせて検討することで、留学生のニーズが明確になる。詳しいアンケート結果は同報告書に譲るが、論文の書き方や、授業の受け方といったいわゆるアカデミック・スキルを授業科目として希望する学生も多く、授業の中で知り得なかった事項をチューターに相談していると思われる。相談内容には日本語に関する質問もあることから、今後は日本語教員によるチューターに対する日本語教育の基礎セミナーなどの機会を設けることも、相談に対する対処法の一つの手段となるであろう。

#### 5.4 資料室周知の方法

資料室の利用案内を求める学生の多さおよび留学生アンケートの回答に見られる「国際資料室の周知をもっとするべき」との意見からも分かるように、開室の時期、時間帯、活動内容、チューター紹介などを含めた、資料室の利用案内をさらに徹底していくことが今後の充実に向けての大きな課題だと考えられる。これまでは、情報誌「Bridges」への掲載や、留学生オリエンテーションでの紹介、掲示媒体を利用した周知を図ってきたが、今後は、留学生センターホームページでの広報など、他に可能な手段も考えていく必要がある。

### 6 今後の課題

ハードウェアとしての資料室の充実に加え、資料室の一層の有効活用を促すため、今後試みることでできる具体案を提案して結語としたい。

第一に、開室時間の拡大である。可能であれば試みとして時間の延長ならびに、大学休業中の開室日を増やし、利用頻度を現行体制と比較することで、今後の指針となる結果が現れてくるであろう。

第二に、利用頻度を高める試作の一環として、曜日毎のチューターの広報を行う。現在考えられる方法としては、現在のようなチューターの名前・所属のみの紹介から、写真や専門領域、その他得意分野、例えばコンピュータ関連、外国語、資格等、を盛り込んだ紹介に替え、文字通り「顔の見える」チューター広報を目指すことが考えられる。

第三に、利用者の満足度を高める対策として、蔵書の充実と各相談への対応方針の統一を図る必要がある。蔵書に関しては、これまで購入希望調査はしてきたが、さらに希望図書を自由に書き込めるノートの設置箇所を増設するなどして、学生の希望を広く取り入れられる方法を取りたい。

第四に、相談の一部は留学生相談室や留学生センター専任日本語教員、留学生課などへつなぐことが可能であり、また、その役割も担っていることをチューターに認識してもらう必要がある。

第五に、最大の課題として資料室の周知拡大が挙げられる。現在では前述したメディアで

の案内に留まっているが、今後は、外国人留学生に関しては留学生をゼミ生として受け持つ各研究科教員からの必要に応じた案内や、個人チューター利用期間が終了する学生への案内など、積極的に行うべきである。また日本人学生利用者には、留学生課や相談室へ留学相談のあった学生に対する紹介や、附属図書館などへの掲示場所拡大も視野に入れることが必要となるであろう。

留学生として日本で勉強・研究する外国人学生と、これから留学生となる日本人学生が共に活用できる場として、さらに機能的な場となるような資料室の改革が望まれる。利用者、チューター、留学生課、留学生相談室の声を聞きながらの改善は欠かせないが、そのためには資料室の存在そのものや、利用価値を再認識してもらう必要がある。資料室存在の周知を第一の課題として、日本人学生、外国人留学生の双方にとって利用しやすい場となることが本学の実質的な「国際化」を促すものと確信する。

#### 引用文献

有川友子 2000 21世紀に求められる日本人と留学生との交流のあり方 「留学生と地域交流」という視点を超えて 『留学交流』, 12, 2-5